

白椿

夢野久作

青空文庫

ちえ子さんは可愛らしい綺麗な児でしたが、勉強がきらいで遊んでばかりいるので、学校を何べんも落第しました。そしてお父さんやお母さんに叱られる毎に、^{ごと}「ああ、嫌だ嫌だ。どうかして勉強しないで学校がよく出来る工夫は無いかしらん」と、そればかり考えておりました。

ある日、どうしてもしなくてはならぬ算術をやっておりました。が、どうしてもわからぬ上にねむくてたまりませんので、大きなあくびを一つしてお庭に出てみると、白い寒椿がたった一つ^{つぼみ}蕾を開いておりました。ちえ子さんはそれを見ると、「ああ、こんな花になったらいいだろう。学校にも何にも行かずに、花が咲いて

人から可愛がられる。ああ、花になりたい」と思いながら、その花に顔を近づけて香い^{にお}を嗅^かいでみました。

その白椿の香気のいい事、眼も眩^{くら}むようでした。思わず噎^むせ返って、

「ハックシン」

と大きくしやみを一つして、フツと眼を開いてみると、どうでしょう。自分はいつの間にか白い寒椿の花になっていて、眼の前にはちえ子さんそっくりの女の子が立ちながら自分を見上げております。

ちえ子さんはびっくりしましたが、どうする事も出来ませんでした。只呆れてしまって、その児の様子を見ておりますと、その

女の児は自分を見ながら、

「まあ、何という美しい花でしょう。そしてほんとにいいにおいだこと。これを一輪ぎしに挿して勉強したいな。お母様に聞いて来ましょう」

と云いながらバタバタと駆けて行きました。

しばらくすると、ちえ子さんのお母さんが花鋏を持ってお庭に降りておいでになりました。

「まあ、お前が勉強をするなんて珍らしい事ねえ。お前が勉強さえしておくれだったら、椿の花くらい何でもありませんよ」

と云いながら、ちえ子さんの白椿をパチンと鋏切って、一輪挿しにさして、ちえ子さんの机の上に置いておやりになりました。

ちえ子さんは机の隅から見ていますと、女の児はさもうれしうに可愛らしい眼で自分を見ておりましたが、やがて算術の手帳を出しておけいこを初めました。

ちえ子さんの白椿は、真赤になりたい位きま極りが悪くなりました。算術の帳面には違った答えばかりで、処々にはつまらない絵などが書いてあります。女の児はそれをゴムで奇麗に消して、間違つた答えをみんな直して、明日の宿題までも済ましてしまいました。それを見ているうちにちえ子さんは、算術のしかたがだんだんわかつて来て面白くて堪らず、自分でやってみたくなりましたが、花になっているのですから仕方がありません。

そのうちに女の児は算術を済まして、読本を開いて、本に小さ

く鉛筆でつけてある仮名を皆消してしまいました。おさらいと明^あす日の下読^すが済むと、筆入やカバンを奇麗に掃除して、鉛筆を上手に削って、時間表に合せた書物や雑記帳と一所に入れて机の上に正しく置きました。それから机の抽^{ひきだし}斗をあけてキッチンと片づけて、押しこんだいたずら書きの紙屑や糸くずをちゃんと展^のばして、紙は帳面に作り、糸は糸巻きに巻きました。その間のちえ子さんの極りのわるさ！消えてしまいたい位でした。

女の児はそれから、台所で働いていらつしやるお母様の処へ走って行つて、手を突いて、

「お母さん、お手伝いさせて頂戴」
と云いました。

お母様はしばらくだまって女の児の顔を見ておいでになりましたが、濡れたままの手でいきなりしつかりと女の児を抱きしめて、「まあ、お前は どうして そんなによい子になったの」

と云いながら、涙をハラハラとお流しになりました。

白椿のちえ子さんは身を震わしてこの様子を見ておりました。

ちえ子さんもお母さまからこんなにして可愛がられた事は今まで一度も無かったのです。あんまり羨ましくて情なくて口惜くちおしくて、思わずホロホロと水晶のような露を机の上に落しました。

それからこの女の児がする事は、何一つとしてちえ子さんを感じさせない事はありませんでした。

遊びに誘いに来るわるいお友達はみんな、お母様にたのんで断

つて頂いて、よいお友達と遊ぶようにしました。

「ちえ子のちえ子の大馬鹿やい。ちえ子の知恵無し落第坊主、一年二度ずつエンヤラヤ、学校出るのに……ツーツータアカアセ」

と悪い男の生徒がはやしても、家の中から笑つていました。^{うち}

そのほか勉強のひまには編物をお母さんから習いました。夜はお祖父さまの肩をもみました。お母様のお使い、お父様の御用向でも、ハイハイとはたきました。そうして自分の事は何一つお母様やお祖母様に御迷惑をかけませんでした。

お家の人は皆驚いて感心をして賞め千切つて、いろいろのものを買つて下さいました。しかし女の児はそれを大切にしまつて、今までちえ子さんが使い古したもののばかり使いました。

けれどもお家の人よりも何よりも驚いたのは学校の先生でした。今までは何をきいてもうつむいてばかりいたちえ子が、今度は何を聞いてもすっかり勉強しておぼえていて、時々先生も困る位よい質問を出します。

そればかりでなく、今まで運動場で遊んでいても、直に泣いたり、おこつたり、すねたり、よけいなくまれ口をきいたりして嫌われていたちえ子が、急に親切にやさしくなつて、どんな遊戯でもいやがらずに、それはそれは元気よく愉快に仲よく遊びますので、友達の出来る事出来る事。今まで寄り付かなかったよい友達が、みんな遊びたがつてお家にまで来るようになりました。女の児はいつもよいお友達と音なく遊んで、音なく勉強し

ました。

来るお友達も来るお友達も、みんなちえ子さんの机の上の一輪ざしに生けてある白椿の花を賞めました。その時女の児はいつもこう答えました。

「あたしはこの白椿のようになりたいといつも思っています」

「ほんとにね」

と友達は皆、女の児の清い心持ちに感心をしてため息をしました。

ちえ子さんの白椿は日に増し淋しく悲しくなつて来ました。

「あたしのようなわるい児はこのまま散つてしまつて、あの女の児が^{あたし}妾の代りになつてゐる方がどれ位みんなのしあわせになるか

もしれない。どうぞ神様、妾の代りにあの女の児がしあわせでいるように、そうしていつまでもかわらずにいるように」と心から祈って、涙をホロホロと流しました。

その中^{うち}にだんだん気が遠くなって、ガツクリとうなだれてしまいました。

×

×

×

「まあちえ子さん、大変じゃないの。総甲を取っているのに、何だって今まで見たいに成績を隠すのです。お起きなさいってば、

ちえ子さん。そんなに勉強ばかりして身体からだに障りますよ」

とお母さんの声がします。フツと眼をあけてみると、ちえ子さんは算術の本を開いてその上にうたた寝をしているのでした。

眼の前の机の上の一輪挿しには椿の枝と葉ばかりが挿さつていて、花はしおれ返ったままうつ伏せに落ちておりました。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

※この作品は初出時に署名「海若藍平《かいじやくらんぺい》」で発表されたことが解題に記載されています。

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月19日公開

2003年10月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白椿

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>